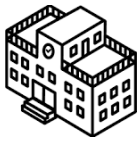
こころ日記「ぼちぼち」その③

障がいがあるということ

毎月一回、まちの保健室「ちむちむ」に通ってくる若者がいる。教え子の一人で、中学１年生のときからの付き合いだ。もう二十歳を過ぎ、身の回りのおしゃれにもこだわるたくましい青年になっている。

ハルキは小学校から特別支援学級に所属し、中学校でも特別支援知的学級に入っていた。

公立学校の特別支援学級の仕組みはとても複雑だ。支援学級の定員は、１クラスあたり８人を上限。障害の種別ごとに設置されていて、知的障害、肢体不自由、病弱・身体虚弱、弱視、難聴、言語障害、自閉症・情緒障害などの学級がある。この中に類する子ども一人でも入学すれば、学級を設置しなければならない。現在学校現場では、特別支援学級数がとても増えてきている。ある小学校では１０クラス。中学校でも 30 人以上いる学校もある。クラス数も多く、配置する教員不足が深刻だ。担任は障がいのある子ども一人ひとりの週案を作成し、交流学級で受ける授業科目を計画をし、保護者にも知らせなければならない。本当に激務だと思う。



知的障がいのあるハルキは、学級活動や道徳、体育、音楽の授業は交流学級で受けることになっていた。交流学級では、文化祭や体育大会では、メンバーとして活動することになっていた。が、彼はどうしても交流学級に馴染めず、いつも渋る姿があった。

正直交流学級の生徒たちは、週に数回しか来ない同級生には、名前も覚えずほとんど無関心な態度だ。あえて一緒にコミュニケーションをとる活動を仕組まなければ、なかなか友達ができない。ハルキはいつも気難しい顔をし、妙に正義感が強いので、周りの生徒の行動が許されずいつも不機嫌だった。

ハルキの知的支援学級には、８人の個性ある生徒ばかりが在籍していた。入学当初は互いのことがよくわからず、常にトラブルが起こっていた。その騒動に駆り出されるのが、担任外戦力のフリーの教師の私だった。事件がおこるたびに、対応に忙しかったのを覚えている。

実は交流学級に行っても、ハルキは何かに怒り爆発し、興奮する状況が起こっていた。

例えば、暴言を吐く、物を投げる、机などをひっくり返すなど､交流学級の生徒たちは、障がいがあるからと敬遠し、ますます嫌うようになっていった。

折に触れハルキに関わる機会があり、話しができるようになってきたとき、彼は、「先生にはわからないいじめをされている！」と打ち明けた。

交流学級の担任は、日々の学級に忙しく、支援学級の生徒への思いになかなか至らないのが現状だ。しかし、いじめは放置できない。ハルキの支援学級の担任にも伝えるも、のらりくらり。

「何に怒っているの？」と尋ねると
「クラスのみんなは、ぼくのことを障がいがあるからと言って、馬鹿にしている」と返ってきた。「絶対に許せない！」と、体中を震わせ訴えた。

実際はわからないが、ハルキはそう感じているのだなと、私は理解した。しかし次の言葉が出てこない。

他の教員なら､「あなたにも良い所があるのだから大丈夫だよ」とでも言ったかもしれない。

しかし、ハルキの言う通り障がいがあることは事実だ。そのことをハルキは、自分の

中で自問自答し、障がいがあることで、周りから特別扱いされ、彼にとっての理不尽な扱いが、たまらなく許せなかったのだろう。言葉で冷静に言い返せない分、色々な物に当たるしかなかったのだ。私はひたすら聞くに徹した。

家族を思う…

ハルキの家族は、母と兄との３人家族。母親はハルキが小さいころに離婚したので、父親の顔は覚えていないとのこと。生まれた時から病弱で、知的にも障がいがることが分かり、母親は苦労をしたと聞いている。子育てには手がかかり、小学校でも周りの子とのトラブルが絶えず、相手にけがをさせないかいつもハラハラしている状況だったらしい。母親の父母がそばにいてくれたので、随分と助けられたそうだ。

中学校卒業のころ、連絡が途絶えていた父親が亡くなったという知らせを受けた。顔も知らない、母親からも父親のことは何も教えてもらえなかった。そんな父親が死んでしまったことに、ハルキは戸惑い、どのように受けとめればいいのか悩んだと言う。

父方の祖父が健在であることも分かり、意を決し家族で父親のお墓参りに行ったそうだ。父親が育った郷里を初めて訪ね、父親の面影を感じることができたのではないだろうか。「僕にもう一人おじいちゃんがいたことがわかって嬉しい」と言った。

従妹もいることが分かり、自分には今の家族以外にも家族がいたことを、とても嬉しそうに語ってくれた。祖父から、生きていた時の父親の話も聞くことができたそうだ。

夫婦としての母親の心境は別として、子どもにとって自分を産んでくれた父親のルーツに触れることは、大事なことだと思う。

その後、彼は父親の郷里に度々訪れたと聞いている。

障がいがあることを負に思い、自己肯定感も低いハルキだが、家族への思いは人一倍。家族のことが大好きだ。自分は人並みに稼げないし、親を安心させられないが、日々の暮らしでできることはしたいと言う。家では、進んで家事も担う。

数年前に母親が大病を患ったときは、自分は母親なしでどうやって生きていくのか、不安で眠れなかったと。障がいのある子を残して世を去る親の気持ちもさることながら、子も親の存在を感じているのだと思った。

新しい家族？

中学校卒業後は、近隣の養護学校に入り、無事に卒業した。いつの間にか、私とは世の中のことや障がいのこと、将来のことなどを、対等に語り合う仲になった。

ただ今でも、自分がなぜ障がいがある人間に生まれてきたのか、車の免許も取れない、普通の若者のように自由に動くこともできない、社会に出るには色々な制限があり、自分の障がいが受け入れられずいる、といったことを口にすることがある。それはそれで仕方がないと思う。

ハルキには、今恋人がいる。つき合ってもう２年になる。異性愛だが、彼女も知的障がい者である。月一回二人で語らいにやってくる。深刻な相談もあるが、デートはどこ行っただの､こんなことで喧嘩したなどの雑談だ。時折、中学校ではよく暴れていたなと笑って彼女に話す。

最近彼は、よく「結婚」という言葉を口にする。将来の好きな人との生活を思い描いているのだろう。お節介だが、人との出会いは色々。別れもある。失敗も大切だと伝えている。

二人は今、人とのふれあいでの色々な知識を持ちたがっている。知識と実践は違う。どう行動するか、対等な二人の関係の中で、スキルを身に付けていってほしいと思っている。

つづく